

年頭所感-----変化の時代



所長鈴木基之

Motoyuki
SUZUKI

あけましておめでとうございます。新たな年を迎えるにあたって、生産技術研究所の活動を暖かく見守って頂き、本所を応援して頂いている多くの皆様方のご多幸を教職員一同と共に、お祈り申し上げます。

さて、我々を取り巻く環境は、長く、新しい変動の時代を迎えております。昨年は第二次大戦後50年を迎え、戦時・戦後に伴う多くの問題と共に新生日本の発展に対して思いを新たにしました。この10年においては、それまで長く続いた冷戦構造の終結がベルリンの壁の取り壊しに象徴される様に、世界的な大歓迎を受けたものでありましたが、その後はソ連邦の崩壊を初めとし、現在に至るまで多くの地域戦争を齎し、新たな戦争管理体制が必要とされております。わが国においても、これに促されるかのように数年前から見られる政治面での「55年体制」の破綻から、それに替わる新しい体制の模索は未だその前途は不透明であります。経済面では為替変動、不況の長期化、異常とも思われる低金利、国際収支の不均衡から端を発しているわが国に対する規制緩和と要求などにも反映され、ここに対する対応も模索段階そのものの様に見えます。

日常生活においても昨年当初の阪神淡路の大震災を初めとし、地下鉄毒ガス事件などなど多面にわたる社会不安、地球環境の将来に対する具体的な警告、度重なる核実験等も、これまで当たり前と感じていた多くの常識を改めて見直す機会を与えてくれることとなりました。

今後の状況も、おそらく全ての面において、一見して不透明な状況が続くと考えざるを得ないでありましょう。しかしながら、不透明な激動の時代であるからこそ表面的事象に踊らされずに、その本質をどう見据えるのかが重要であり、それに基づいて今後の対応を決めていく必要があるでしょう。色々なシステムは定常状態をみているよりは、動的な変化をみることによって初めてその内部構造も理解されるようになります。

生産技術研究所は昭和24年に発足して以来、戦後のわが国の発展と軌を一にして素晴らしい質的成長を遂げてきていると言えます。これは本所における教官諸先達の継続した知的活動の集積により作り上げられた資産であります。そこにおいてはまた、研究活動を支えている技術系、事務系の職員の献身的な力が見えます。本所は、これまでの7次にわたる将来計画の検討、研究推進のための色々な仕組みの構築を初めとする種々の面において、わが国における最大の工学系の大学付置研のあるべき姿を問い続け、時代の要請に応える努力を常に続けてきたと言って良いでありましょう。この成果は、昨年6月に開催された「第三者評価（国際パネル）」におきましても、都市型の総合工学研究所としての活動の状況を高く評価して頂くことを得ました。

設立以来47年目を迎える今年は、間もなく到来する50年という区切りに向けて準備を始める必要があります。「五十にして天命を知る」という論語（為政第二、四）にも見られるように、50年を経過するということは、いわば人の定めごとを超えた「天命」を意識し、その社会的役割も自ずから成熟したものとしての認識が必要となるということでしょう。単にこれまでの本所の活動の外挿の上に今後の方針を設定するのではなく、これまでに本所に蓄積された「躍動する科学技術研究の文化」をいかに次の世紀のわが国の科学技術の展開に活かし、人類の活動を支える為の根源的な役割を

果たしていくことが出来るかを構想していくことが重要となるであります。

本所は長年住み慣れた六本木キャンパスの庁舎から、いよいよ今年は駒場第二キャンパスにおける新営計画の実行段階に入って参ります。生産技術研究所の50周年を祝う機会があるとすれば、六本木から駒場への移転過程になるであります。駒場キャンパスにおいては、大学の付置研として、さらに社会に開かれた科学技術の高度研究、高度教育を遂行し、先導的な科学技術文化の拠点として大きくはばたく為に国際貢献の出来る施設と設備を整え、そしてなによりも大切な「人」の集まる研究拠点としての生産技術研究所が構築されているでしょう。この目標に向けてこれから数年間の努力を始める時になります。日常的な研究活性を低下させることなく新営計画を実行していく為に、所内の構成員一体となって努力する所存でございますので、皆様方の一層のご支援をお願い申し上げます。